

日本人はどう悲しむか - 日独の自死遺族掲示板コーパスと 均衡コーパスを用いた「感情」の言語表現比較の試み -

A Cross-Cultural Comparison of Emotional Expression - Japanese and German Web Forums for People in Mourning -

Michaela Oberwinkler

要 旨

「日本人はなぜ私たちと違う悲しみ方をするのか。」これは東日本大震災直後の日本人の行動に対し、ドイツメディアが投げかけた問いである。こうした疑問に対しこれまでの心理学の研究成果は、いくつかの基本的な感情があらゆる文化に普遍的である一方、感情の表出はその人が属する社会や文化の影響を色濃く受けていることを示唆している。もし震災の悲劇に直面する日本人を見たドイツ人が感じたように異なる文化圏に属する人々が「異なる悲しみ方」をするならば、その違いは言語表現にも自ずと反映されているはずであり、言語表現が持つ意味的・構造的制約が感情表出の在り方にも影響を与えているはずである。本稿では、コーパス調査に基づく感情の言語表出を比較する試みについて調査方法とその分析、そして問題点について述べる。本調査では「悲しむ人の言語表現」として自死遺族によるウェブ上での書き言葉を調査対象とし、ウェブ上の日独の自死遺族掲示板を基にコーパスを構築した。このコーパスを日本語の大規模コーパスである「現代日本語書き言葉均衡コーパス」と「筑波ウェブコーパス」と比較し、後悔の「てしまう」、被害の受身文、使役文の3つの構文の使用傾向が特徴的であると結論づけた。また、日独二言語の自死遺族掲示板コーパスを比較し、特に比喻の使用や人称表現、語りかける対象にそれぞれの言語・文化の特徴が反映されることを示した。

キーワード

日本語 日本文化 コーパス 感情 悲しみ 異文化理解

1 はじめに

メディアによって流される言説には「所属する文化によって人の感情が異なる」という考え方に基づくものが多い。ごく最近の例では、未曾有の大災害となった2011年3月11日の東日本大震災のニュースにおいて「日本人がどう悲しむか」を考察したドイツでの一連の報道が挙げられる。例えば、2011年4月23日付けの Spiegel Online

の記事は「Warum Japaner anders trauern (なぜ日本人は違う悲しみ方をするのか)」という印象的なタイトルのもと、「地震、津波、原子炉事故：日本は立て続けに予期せざる大災害に見舞われている。それにも関わらず人々は弱音を吐くでもなく、泣くでもなく、並外れた力強さを見せている。これはどういうことだろう。」と、日本人特有の悲しみとの関わり方について考察している¹。

感情はあらゆる文化に普遍的なものなのか、文化固有のものなのか。この異文化を経験した多くの人にとって非常に身近で切実な問いについて、心理学者は多くの興味深い議論を重ねてきた。感情があらゆる文化において普遍的であることを示す例としては、非言語コミュニケーションにおけるヒトの表情の研究で、いくつかの基本的な感情を表す表情が多文化に共通していることが証明されている (Ekman & Friesen 1971)。それに対し、感情は経験に依存するものであり、それを誘発する出来事、ひいては社会や文化システムの在り方によって規定されるとする文化心理学の考え方がある (Mesquita & Frijda 1992)。こうした考え方に則れば、感情表現の一つの形式である世界中の多様な「言語」もまた、その固有の枠組みによって感情を規定する社会・文化システム的な要素であるといえる。

ここで、冒頭に述べたような海外メディアからの視点に基づく「悲しみ方の違い」を言語学の視点から問い直してみよう。もし異なる文化圏に属する人々が「異なる悲しみ方」をしているならば、その違いは感情の表出である言語表現の様々なレベルに反映されている筈である。また反対に、それぞれの言語の形式が感情表出や感情との関わり方に影響を与えているとも考えられる。たとえば語彙レベルの研究では、多言語間で感情語彙から想起される感覚が厳密には異なることがわかっており、社会・文化に根ざした感情経験を反映したものであると考察されている (Mesquita & Frijda 1992)。こうした「感情と言語表現」というテーマを巡っては、オノマトペと感情表現の研究 (山内 1978) や認知言語学における感情メタファーの研究 (Kövecses 2003) をはじめ様々な興味深い研究があるが、本稿ではコーパスを利用した定量的分析を通じて、感情と言語、そしてその背景にある文化の関わり方について考えてみたい。

本稿で述べる調査では、日本研究において様々な社会問題の文脈で研究されている自死²にまつわる悲しみの感情を取り上げた。自死によって親しい人を亡くした人々の言語表現に着目し、インターネット上の掲示板に投稿された自死遺族による「悲しみ」の言語表現をコーパス化し、同一言語の均衡コーパスと比較した。また、ドイツ語でも同一規模の自死遺族掲示板コーパスを構築し、それぞれの言語における感情表現の違いを調査した。この研究を通じて、悲しむ人の言語表現の特徴を明らかにするとともに、それぞれの文化における「悲しみ」の感情そのものとの関わり方の違いを考察する³。

以下、本稿第2章では、2011年に実施した予備調査の概要と問題点、そして今回実施したコーパス調査の方法論的な概要を述べる。第3章では、自死遺族掲示板におけ

る日本語の「悲しみの言語表現」の構文的特徴について、均衡コーパスとの比較によって考察する。第4章では日本語話者とドイツ語話者による自死遺族掲示板のコーパスを比較し、終章では現段階での結論と、今回の調査方法で扱えなかった今後の課題について述べる。

2 データと調査方法

2.1 調査の概要

この調査では、独自のコーパスと i.) 同一言語内での均衡コーパスとの比較と、ii.) ドイツ語のコーパスとの対照調査という二つの異なる視点から、日本語の「悲しみ」に関する言語表現の特徴を明らかにした。第1段階では、インターネット上の自死遺族掲示板のデータベースをもとに小規模なテキストコーパスを構築し、現代日本語書き言葉均衡コーパスと筑波ウェブコーパスという2つの大規模コーパスと比較した。この過程では、自死遺族掲示板のコーパスを同一言語のいわゆる「平均的な」大規模均衡コーパスと比較することによって、語彙的・統語的な傾向の差異をもとに、日本語における悲しみの言語表現の特徴を明確にすることを意図している。この同一言語内の調査で特に注目したのは、動詞の使用傾向の違いである。第2段階では、日独における自死遺族掲示板のコーパスデータから感情語彙・人称関連語彙・表現等を分類し、対照した⁴。これによって、異文化における悲しみとの関わり方がどのような形で言語に表出しているかを考察した。

2.2 予備調査

調査で重視すべきポイントを事前に絞り込むため、予備調査として収録語数の少ない小規模コーパス⁵を構築し、質的・量的分析を行った。この小規模コーパスから得られたデータと考察は Oberwinkler (2011) で既に報告しているが、本調査での調査方法・項目はこの段階で得られた仮定や問題点を下敷きにしていく。

予備調査では主に、項目別の語彙の使用頻度と、身内の死を表す動詞と構文を調査した。また、その結果を均衡コーパスの日本語データと比較することによって、自死遺族掲示板コーパスで用いられる日本語の傾向を調べた。この分析結果から、i.) 日本語の自死遺族掲示板コーパスでは後悔の「V～てしまう」(e.g. 死んでしまう)、使役文(e.g. ～を死なせる)、被害の受身文(e.g. ～に死なれる)の使用頻度が均衡コーパスと比較して高いこと、また、ii.) 日本語とドイツ語を比較すると、「死」を表す名詞・動詞の調査項目で使用語彙の傾向が異なることが分かった。この予備調査では、第一点に挙げた3つの構文を統計的に調査するには用例が足りず、詳細な分析は本調査に持ち越しとした。また第二点の言語間比較では、人称や話者との関係性を表す表現、感謝や謝罪の表現や言語にも言語間の差異があると予想した。

2.3 本調査に向けて作成したコーパス

「悲しみ」の言語表現について二言語間での対照を行うため、ドイツ語と日本語のウェブ上の自死遺族掲示板からのテキストを収集した。ここで使用したテキストコーパスは6つのインターネット掲示板からサンプリングしており、うち1つが日本語の掲示板、5つがドイツ語の掲示板である⁶。収録元の掲示板の総数が日本語とドイツ語で異なるのは、収集対象のテキストが投稿された時期を基準にサンプリング対象を限定し、その上で両コーパスへの収録語数を揃えようとしたためであり、2009年から2011年の3年間に書かれたものを収録している。それぞれのコーパスの収録語数は、日本語が584,785語、ドイツ語が573,770語で、予備調査時の約7倍に拡大している。以下、本稿ではこの日独両言語のコーパスを Oberwinkler コーパス、もしくは自死遺族掲示板コーパスとする。

2.4 比較対象とした日本語の大規模コーパス

Oberwinkler コーパスにおける日本語を、標準的な2つの日本語の大規模コーパスと比較・考察した。一つは、国立国語研究所によって構築された1億語の「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese : BCCWJ)であり、もう一つは日本語のウェブサイトから収集して構築された約11億語のコーパス、「筑波ウェブコーパス」(Tsukuba Web Corpus : TWC)である。均衡コーパスとは、対象言語の性質やふるまいの全体像を反映することを意図し、様々な種類のテキストをバランスよくサンプリングして構築したコーパスであり、他の特殊なテキストを収録したコーパスと比較する事によって、そこに含まれる言語表現の特徴的傾向を明らかにすることができる。予備調査ではBCCWJのみを比較対象としたのに対し、本調査では筑波ウェブコーパスを新たに比較対象としているが、これはBCCWJの約10倍にあたる更に大規模なコーパスを用いることにより、統計的に更に信頼できる調査にするためである。また、ウェブ上の日本語同士を比較することによって、BCCWJとは異なる結果が出る可能性があることも考慮している。

2.5 コーパスの処理と分析

ドイツ語と日本語の掲示板をもとにした小規模コーパスの構築と機械的解析には、Web上でのコーパス作成・解析システムである Sketch-Engine を用いた。Sketch-Engine 上で構築した日本語コーパスから機械的に抽出される様々な分析結果は「茶筌 (ChaSen)」の形態素解析を利用している (使用辞書は IPADIC)。本調査で Sketch-Engine を用いる主な利点としては、まず同一のインターフェース上で日本語とドイツ語をそれぞれの言語固有の文法条件 (sketch grammar) に合わせて検索・分析できるという点 (手段の統一性)、また、抽出対象の語とそれに付随する文法情報やコロケーションの概要を俯瞰的に見ることのできる Word Sketch 機能があることで、

コーパスの構築から処理・分析までを1つのシステムの中で実現できるという点（操作の一貫性）が挙げられる。

また「現代日本語書き言葉均衡コーパス」と「筑波ウェブコーパス」の大規模コーパスについては、それぞれ、国立国語研究所とLago言語研究所によって共同開発されたWeb上のコーパス検索システムNINJAL-LWP (NINJAL-Lago Word Profiler) を使用した。

なお、NINJAL-LWPによる動詞の機械的な抽出・分析では、対象とする語彙によって構文の抽出結果に誤りやばらつきがある。たとえば、後悔・遺憾の「～てしまう」を抽出する際、NINJAL-LWPによる分類結果では本来、「テ形+動詞」の複合動詞に分類される。しかし、調査で対象とした「死ぬ」「逝く」のテ形のように音便形を取り「死んで（撥音便）」「逝って（促音便）」となる場合、NINJAL-LWP for TWCでは「～テ+動詞」には分類されず、他の項目と共に未分類項目として振り分けられてしまう。同様の誤分類例は他の構文でもあり、コーパスを機械的な処理にかける際にはこのような分類のばらつきが起こりうることに注意が必要である。今回の調査では、重要項目のなかで形態的に適切に分類されないものを予測し、未分類項目に振り分けられたデータから調査者が手動で分類し直すことによって信頼できるデータに書き換える作業を行っている。第3章1項 (BCCWJ) と2項 (TWC) に統計データとして示されているものはNINJAL-LWPから得られた直接の結果ではなく、適宜、調査者が訂正を加えたものである⁷。

3 日本語コーパス：構文による比較

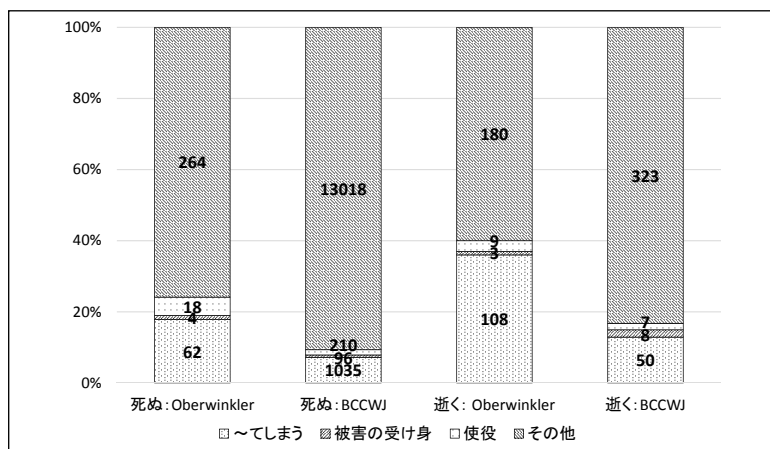
本章では、自死遺族掲示板コーパスと日本語の2つの大規模コーパスを、主に動詞の活用形・構文の使用傾向に注目して比較対照した結果について述べる。

3.1 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」との比較

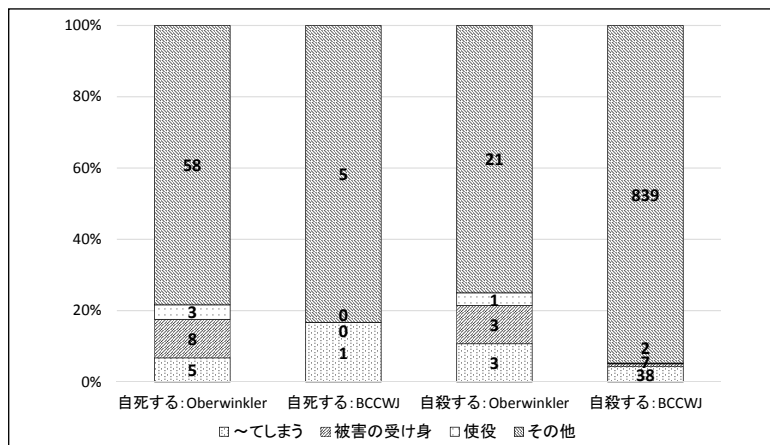
まず、自死遺族掲示板コーパスと現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) で、使用頻度に有意差が見られる構文を比較した。調査対象としたのは、動詞「死ぬ・逝く」と、動作の漢語名詞+サ変動詞スルの複合語「自殺する・自死する⁸」の四つの動詞であり、これは自死遺族掲示板コーパスでの使用頻度で上位にあった身内の死に関わる動詞のうち、「旅立つ」などのメタファーを除外したものである。

このうち、自死遺族掲示板コーパスで特徴的だった使用頻度の高い構文は後悔・遺憾の「～てしまう」、使役文、被害の受身文（間接受身文）の3つである。受身文の「被害」の用法のみを動詞の形態によって機械的に探し出すことはできないため、機械的に抽出した「れる・られる」形の文例から手動で分類した。

動詞「死ぬ」の構文別頻度を比較すると、Oberwinklerコーパスでは「～てしまう」62回（18%）、被害の受身文4回（1%）、使役文18回（5%）の3構文が全体の



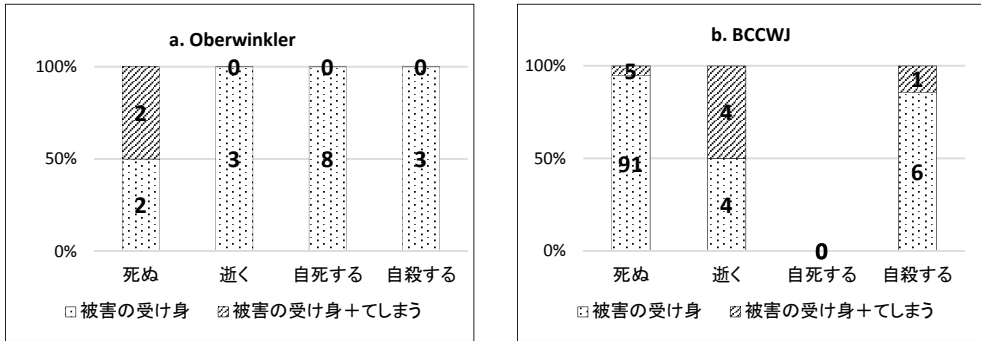
【図1】動詞「死ぬ」、「逝く」の使用構文比較（自死遺族掲示板コーパス・BCCWJ）



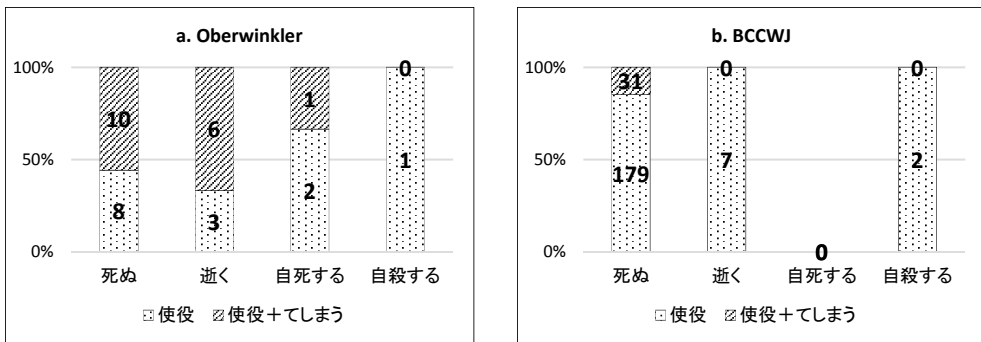
【図2】動詞「自死する」「自殺する」の使用構文比較（自死遺族掲示板コーパス・BCCWJ）

24%を占めるのに対し、BCCWJでは「てしまう」1035回（7%）、被害の受身文96回（1%）、使役文210回（5%）と10%に満たない（図1）。これら3つの構文が占める割合は、他の3動詞「逝く」（図1：Oberwinkler：40%、BCCWJ：17%）、「自死する」（図2：Oberwinkler：22%、BCCWJ：17%）、自殺する（図2：Oberwinkler：16%、BCCWJ：5%）」においても自死遺族掲示板コーパスでの使用頻度が高くなっており、これは全体的な傾向といえる。これらの構文は、書き手がi.)「身内の死」という出来事について後悔や心残りを感じていること（～てしまう）、ii.)この出来事によって精神的な衝撃や苦痛を受けたこと（被害の受身）、そしてiii.)その出来事を止められなかったこと、自分が遠因となったかもしれないことに自責の念を感じていること（使役）という、「身内の死」という出来事によって引き起こされた感情とリンクしていると考えられる。こうした両コーパスの明確な違いは、自死遺族の発話動機の中核である「後

日本人はどう悲しむか (Michaela Oberwinkler)



【図3】「被害の受け身+〜てしまう」形の比較 (自死遺族掲示板コーパス・BCCWJ)



【図4】「使役+〜てしまう」形の比較 (自死遺族掲示板コーパス・BCCWJ)

悔・精神的被害・自責」といった感情が構文の使用頻度にダイレクトに反映された結果になっていると推測できる。

さらに、動詞「死ぬ・逝く」の調査結果と動作の漢語名詞+サ変「スル」の複合である「自殺する・自死する」の間には構文使用の傾向に差がある。これら4動詞は全て非能格動詞であり、文法的には間接受身文(被害の受身文)にも使役文にも適合するはずである。まず、Oberwinkler コーパスでの動詞「自殺する・自死する」に注目すると「〜てしまう」、使役文、被害の受身文にそれぞれ用例があるのに対し、BCCWJにおいては動詞「自死する」では使役と被害の受身の用例が皆無であり、「自殺する」でも全体の1%未満と、極端に少なくなっている。この違いの説明は容易ではないが、ここに挙げた4動詞は全て意志的な動作を表す動詞ではあるものの、「自死」「自殺」という語彙はその成り立ちによって「自らの意志で自らが」という意味内容を特に強調しており、その行為を「他人がさせる」ことや「他人に働きかけ影響を与える」ことを表す構文とは語義的に併用されづらいと考えられる。この考え方に従えば、「自死される・させる」の活用形が自死遺族掲示板でより頻繁に用いられている理由は、書き手である自死遺族にとって亡くなった人物が身内であることと関係しているのかもしれない。遺族は心情的に死者と近接していること、いわゆる日本文化におけるウチ・ソト概念の「ウチ」の関係にあることによって「自ら」という語義に矛盾を感じにくいと説明できる。

上記のような、個別に「～てしまう」・受身・使役の構文使用を調べた統計に加え、受身形と使役形それぞれに「～てしまう」が続く文型の使用傾向について調査した。以下は、被害の受身文 (e.g. 死なれる) と被害の受身+てしまう (e.g. 死なれてしまう) (図3)、使役文 (e.g. 死なせる) と使役+てしまう (e.g. 死なせてしまう) (図4) の調査結果である。

動詞「死ぬ」の被害の受身を見ると、自死遺族掲示板コーパスでは「死なれてしまう」の用例が全体の50%を占め、それに対し、BCCWJから抽出した被害の受身の用例では「～てしまう」を伴うものが10%以下と非常に稀である(図3)。しかし、他の3動詞を見ると、Oberwinklerコーパスでは「～てしまう」と同時に用いられている例が無く、BCCWJには例があり、被害の受身と「～てしまう」について全体的な傾向を指摘することはできなかった。これに対し、使役「死なせる」では「～てしまう」と併せて用いられる例は、自死遺族掲示板コーパスで明らかに多く、BCCWJでは極めて少ない(図4)。「使役+てしまう」は、身近な人の死を止めることができなかったという遺族ならではの自責(使役)と後悔(～てしまう)が同時に表出している特徴的な構文といえるだろう。

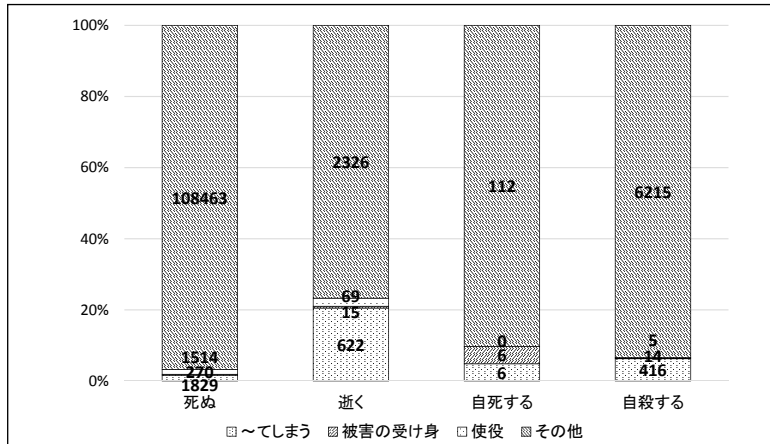
この結果を総合すると、Oberwinklerコーパスでは「被害の受身+～てしまう」が用いられるのは動詞「死ぬ」に限られており、反対に「使役+～てしまう」は全体的に均衡コーパスよりも有意に多い。これは掲示板に書き込んでいる日本人遺族の感情として、自分自身が精神的な傷を負った被害者と位置づけようとする傾向よりも、自分が身近な人を死に向かわせてしまったことを後悔し、自らを責めようとする傾向が強いことを反映していると考えられる。

3.2 「筑波ウェブコーパス (TWC)」との比較

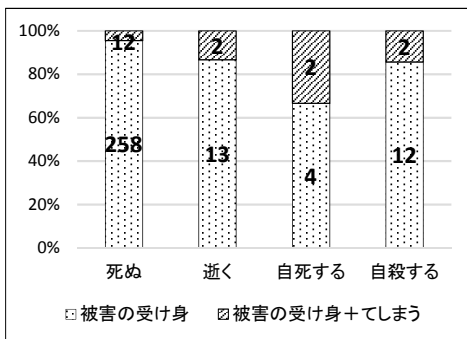
ウェブから収集された大規模コーパスである「筑波ウェブコーパス」とOberwinklerコーパスを、上記BCCWJで行ったものと同様の方法で比較した。3つの構文「～てしまう」、被害の受身文、使役文の使用頻度は、TWCのほうがOberwinklerコーパスよりも有意に低く、この傾向はBCCWJでの結果とも一致する。また、この傾向は特に「死ぬ」「自殺する」「自死する」の3動詞で顕著である(図5 a-d)。TWCは、BCCWJの約10倍の語数を収録する約11億語の大規模コーパスであるため、用例調査を行うのに十分なサンプル数がある。本項ではBCCWJとほぼ同じである全体的な傾向だけではなく、用例調査から見てきた点について言及したい。

TWCで128件ある「自死する」の用例のうち6件は、均衡コーパスでは全く例がなかった被害の受身の用法である。「死ぬ・逝く・自殺する」の3動詞で被害の受身形をとる場合は、話者(書き手)との関係性が近い人物(ウチ・ソト概念のウチに含まれる人物)「[両親に・子供に・夫に・妻に・連れ合い]に死なれる」という用例が大半を占めており、OberwinklerコーパスやBCCWJと同様の傾向である。しかしTWCにおける「自

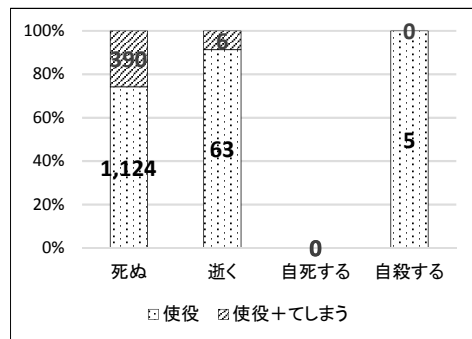
「死する」の被害の受身の用例では、「身近な人に自死された」など特定の人物を指さない形で用いられている。これは、「自死する」という語が社会性の意識と密接に関わっていることが原因と考えられ、個別の話題よりも一般化された話題との親和性が高いためだと分析できる。



【図5】動詞「死ぬ・逝く・自死する・自殺する」の使用構文 (TWC)



【図6】「被害の受け身+～てしまう」形 (TWC)



【図7】「使役+～てしまう」形 (TWC)

より複雑な「被害の受け身+～てしまう」(図6)と「使役+～てしまう」(図7)の構文を見ると、TWCでもBCCWJと同様に複合形の割合は非常に少ない。これは、自責と後悔を反映した「使役+～てしまう」の組み合わせの割合が自死遺族掲示板コーパスでは多くなるとした、前項の結論を補強する結果である。

また、ここでは統計として示さないが、TWCでは使役「死なせる・逝かせる」は「～てもらう・やる・あげる・ほしい (e.g. 死なせてやる)」など授受表現に関するフォームが非常に多いのに対し、サ変との複合形「自殺する・自死する」ではこれらの形が全く見られない。この傾向は「自殺・自死」が語義的に含む「自らの意志で」という意味内容が授受表現との組み合わせを阻害していると言明することができ、前項に述べた「自殺・自死」と受身・使役の組み合わせについての考察の傍証と捉えることができる。

4 日独の自死遺族掲示板コーパス比較

4.1 「死・自死」と「死ぬこと・自死すること」を表す語彙・表現

感情はそれを引き起こす出来事と深く関わっており、その出来事に対してどのように感情を表出するかはその人が持つ文化的・社会的背景によって制約された経験と密接に関連している (Mesquita & Frijda 1992: 198-199)。そして自死遺族掲示板における多くの書き手の感情に最も強い影響を与え「悲しみ」の感情を誘発した出来事は、「身内の死」であったはずである。書き手らにとってトラウマ的な出来事であり、向き合うべき「身内の死」がどのように表されるか、名詞・動詞を含む表現に分けて日独の自死遺族掲示板コーパスを比較した。

まず「死」に関する名詞の頻度を比較した (表1)。これを見ると、日本語の自死遺族掲示板では「死」「自死」「自殺」の順で使用されているが、これを均衡コーパスで調べると「自殺」と「自死」の使用頻度が逆転する。(BCCWJでは「自死」37回に対し「自殺」2,491回と、「自殺」の使用頻度が「自死」を大きく上回っている。) このことから見て「自死」という語彙がこれほど使用されるのは自死遺族掲示板という特殊な場における傾向と考えられ、身内の死を「自らを殺す罪悪」として表現したくないという書き手による意識的な言語表出の抑制が働いていると考察される。これに対し、ドイツ語コーパスでは「Tod (死)」がもっとも多く、次にラテン語由来の「Suizid (自殺・自分を殺すこと)」、ドイツ語の「Selbstmord (自殺・自分を殺すこと)」、その後非常に少ないが「Freitod (自由な死)」が続いている。このなかで日本語の「自死」と最も近い語義的ニュアンスを持つ語彙は「Freitod (frei: 自由な + Tod: 死)」であるが、コーパス内での使用例は他の語彙と比べてかなり少なくなっている。Freitodという語彙はニーチェの『ツァラトゥストラはこう語った』(1883-1885) 32章の題に“Vom freien Tode”の形で用いられたのが最初の用例であり、その後マウトナーによって言及される1923年頃までに徐々に哲学界を中心に広まっていった、比較的新しい語彙である (Mauthner 1923: 180-182)。ただし、哲学用語として広まったこの語は婉曲的美化表現としての性格が強く、ドイツ語由来の複合語「Selbstmord (Selbst: 自らを + mord: 殺す)」の代わりとしてはもっぱらラテン語由来のSuizidが用いられている。ラテン語の「Suicida」もまた「Sui (自分を) + -cida (殺す)」と、Selbstmordと同じ語構成の複合語ではあるものの、外来語であることがクッションとなって「自らを

【表1】「死」に関する名詞

順位	ドイツ語			日本語		
	語彙	頻度 (回)	%	語彙	頻度 (回)	%
1	Tod	477	47%	死	520	56%
2	Suizid	454	45%	自死	313	33%
3	Selbstmord	79	8%	自殺	103	11%
4	Freitod	9	1%			

【表2】「死ぬこと」に関する動詞

順位	ドイツ語			日本語		
	語彙・表現	頻度(回)	(%)	語彙・表現	頻度(回)	(%)
1	Sterben	262	52%	亡くなる	401	28%
2	sich das Leben nehmen	92	18%	死ぬ	350	24%
3	sich umbringen	79	16%	逝く	300	21%
4	tot sein	41	8%	旅立つ	95	7%
5	Suizid begehen	24	5%	自死する	74	5%
6	Selbstmord begehen	5	1%	命を絶つ	59	4%
7	sich töten	2	0%	命を捨てる	42	3%
8	Freitod wählen	2	0%	終える	32	2%
9	Selbstmord verüben	1	0%	自殺する	29	2%
10				生まれ変わる	21	1%
11				死を選ぶ	19	1%
12				去る	17	1%
13				あの世に行く	6	0%
14				自死に至る	2	0%
15				死に至る	1	0%
16				あの世に逃げる	1	0%
計		508	100%		1449	100%

殺す社会的罪悪」を意識させない語彙としてドイツ語の語彙体系の中に定着しており、抵抗感なく用いられていると考えられる。

次に、「死ぬこと」を表す動詞と表現を比較した(表2)。日本語コーパスでは「亡くなる」を筆頭に、前章の構文調査でも登場した「死ぬ」「逝く」などの直接的に死を表す動詞が続くが、その数はいくつかの動詞に分散している。それ以降の表現としては、かなり纏まった数で「旅立つ」などのレトリカルに死を示す婉曲表現が並んでいることが挙げられ、「あの世・旅立ち・生まれ変わる」と書き手の死生観や宗教観を反映した比喩表現、「逃げる」など死ぬことの罪悪を強調する表現のバリエーションが多数見られる。それに対し、ドイツ語では *sterben* (死ぬ) が圧倒的に多く、その後も「自殺を行う」ことを直接的に表した *sich umbringen* (自らを殺す)、*Suizid begehen* (自殺する)、*Selbstmord begehen* (自殺する) などの表現が大半を占めている。「死ぬこと」を意味する表現のなかで2番目に頻度が高いのが「*sich das Leben nehmen* (直訳：自らの命を取る)」だが、これはレトリカルな表現であるにもかかわらず全体の約18%にのぼっている。これを日本語コーパスでの比喩表現を全て合計した割合(21%)と比較すると、「死ぬこと」を表すために比喩表現を使う頻度自体にはそれほど差はないが、ドイツ語の比喩表現の使用が一種類に集中しているのに対し、日本語ではそれぞれの使用頻度が低くバリエーションが多いことが見て取れる。また、*Freitod wählen* (直訳で「自由な死を選ぶ」) が上で紹介した「自由な死」という美化表現だが、ここでも使用頻度は非常に低かった。

4.2 感情語彙の頻度比較

次に、コーパス内の感情に関する語彙をリストアップし、その意味内容と頻度を比較した。今回行った調査のなかで最も判断の難しい問題だったのがこの感情語彙項目で、感情語彙をどのように定義し分類するかという点は「感情と言語」というテーマにおいて未だ解決していない問題の一つである (Schwarz-Friesel, 2007 : 144-149)。たとえば喜怒哀楽や愛しさ、罪悪感などのプロトタイプ的な感情語彙に加えて、「涙」や「笑顔」など感情の表出の結果は感情語彙か、感謝の思いを表す「ありがとう」はどうかと突き詰めていくと、感情語彙か否かを明確に線引きするための定義づけは非常に難しい。また本章で述べる調査は二言語を対象としているが、言語が違えば感情語彙が厳密に同じ意味内容を持ち、かつ同じ文法成分となることはありえない。異文化における感情表出について感情語彙を直接的に用いた調査で比較することの難しさは心理学者によっても指摘されており、厳密な語彙の意味内容やそこから受ける語感、想起される感覚は言語間で異なっているため、安易な比較には慎重であるべきだとされている (Mesquita & Frijda 1992 : 200-201)。本項目ではあえて厳密な定義づけをせず、ドイツ語の母語話者である著者と日本語の母語話者である共同研究者⁹の直感で、感情語彙と思われるものを選び、使用頻度順で上位から15語をリストアップした。ここでは、それによって日本とドイツの自死遺族掲示板における感情語彙の概観を示すのみに留める。

表1で左側に挙げたドイツ語コーパスでの感情語彙の使用頻度を見てみると、一見すると上位に「Liebe (愛)」や「Kraft (力)」などのポジティブな感情語彙が並んで

【表3】自死遺族掲示板コーパスにおける感情語彙と使用頻度

順位	ドイツ語		日本語	
	感情語彙	頻度(回)	感情語彙	頻度(回)
1	Liebe (愛)	2532	辛い	1185
2	Kraft (力)	951	ありがとう	676
3	wünschen (願う)	893	泣く	610
4	Gefühl (感覚)	678	苦しい	484
5	traurig (悲しい)	527	頑張る	378
6	Schmerz (痛み)	518	悲しみ	362
7	Angst (不安)	454	悲しい	344
8	Trauer (憂い)	436	ごめん	284
9	leid/Leid (苦痛)	398	幸せ	273
10	Schuld (罪)	385	寂しい	247
11	schlimm (悪い)	369	苦しみ	229
12	weinen (泣く)	293	苦しむ	227
13	Depression (気鬱)	270	信じる	220
14	allein (孤独な)	245	ごめんなさい	219
15	Glück (幸福)	113	感謝	180

いるように見える。しかし *Liebe* (愛) が多く用いられているのは、ドイツ語の「親愛なる～」という書き出しの挨拶が「*Liebe* + 人名」の形をとるため、感情とは直接的な関係のない別の要因でも計上されているためである。「*Kraft* (力)」は様々な動詞と組み合わせられて比喩的な感情語彙として用いられている場合が多く、ドイツ語のコーパスでは頻繁に用いられている。それ以降の語彙は悲しみや苦しみを直接的に表す形容詞・名詞が続くが、「*Schmerz* (痛み)」という身体的な刺激に対する感覚を表す語彙が感情語彙として用いられており、レトリカルな表現としてはかなり頻度が高い。これに対し、日本語のリストにはこのような比喩的な感情語彙が全く挙がっていないが、日本語コーパスにこれらの比喩表現が無かったのではなく、バリエーションが多くそれぞれの頻度が低くなったためである。

日本語のリストの2位の「ありがとう」や「ごめん (なさい)」は、感情の表出の結果であるため感情語彙のリストに加えた。4位には日本語特有の「頑張る」があるが、主に掲示板内の他者に向けた励ましと自分へ向けた文脈の両方で用いられている。加えて、日本語コーパスでは「幸せ」や「感謝」などのポジティブな感情語彙も多く、これらは掲示板内の他者に対してだけでなく、亡くなった人に対しても用いられている。

ドイツ語と日本語のリストを比較して興味深い語彙の一つが、ドイツ語の *Schuld* (罪) と日本語でそれに対応する語彙である。ドイツ語コーパスでは *Schuld* (罪)、*schuldig* (罪のある)、*Schuldgefühl* (罪悪感) など、罪の意識を表す語彙の使用頻度が非常に高く、日本語ではこれらの語彙が殆ど用いられていない。日本人論の古典的名著である R. ベネディクトの『菊と刀』(1946) などでは、英米の文化を人間の良心に基づく「罪の文化」、日本の文化を社会的・外的要因に基づく「恥の文化」と対照的に比較しているが、今回のコーパス調査から見えることをこのように単純に対照して論ずることはできない。日本語コーパスでは罪という語彙に代わって、謝罪し免罪を求める「ごめん (なさい)」の頻度が高く、また前章で述べたように、自責や罪悪感を表す構文によって文法的に罪を表現している。このことから、日本語コーパスでは直接的に語彙として「罪」を表すよりも、謝罪の表現や構文を用いて間接的に自責を表現する傾向があるといえる。この点について本章第4項では、ドイツ語と日本語の「ありがとう」と「ごめんなさい」の二つの表現の使用傾向を更に詳しく見ていく。

4.3 人称語彙の頻度比較

両言語の特徴を比較するにあたって、使用されている人称表現や人間関係を表す名詞の比較を試みたが、ドイツ語では書き手との人間関係が基本的に人称代名詞を用いて表されること、また文法規則として必ず主語を省略せずに書かなければならないことなど、ドイツ語と日本語では文法上の制約が大きく異なる。そのため、ここでは語彙同士を一对一では対照せず、全体的な傾向のみ比較する。

【表4】自死遺族掲示板コーパスにおける人称語彙と使用頻度

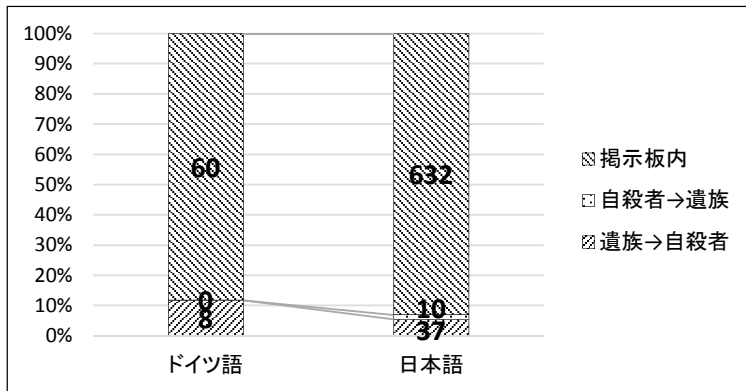
順位	ドイツ語		日本語	
	感情語彙	頻度(回)	感情語彙	頻度(回)
1	ich (私・1人称単数)	27772	私	4529
2	er (彼・3人称単数)	9654	自分	1716
3	du (君・2人称単数親称)	9295	息子	1699
4	es (それ・3人称単数)	8505	娘	885
5	sie (彼女・3人称単数／ 三人称複数)	4145	母	814
6	wir (私たち・1人称複数)	3990	父	539
7	ihr (君たち・2人称複数 ／ 彼女・与格・3人称 単数／ 所有代名詞)	2580	子供	445
8	Mann (夫)	1145	お母さん (1・3人称)	437
9	Mensch (人)	929	あなた	432
10	Kind (子供)	793	弟	392
11	Freund (友人)	684	皆様	334
12	Sohn (息子)	416	夫	324
13	Tochter (娘)	385	主人	242
14	Familie (家族)	367	友達	196
15	Freundin (友人・女)	343	母親	186
16	Mutter (母)	335	妻	173
17	Vater (父)	332	妹	121
18			両親	120

ドイツ語の自死遺族掲示板で使用された上位7語までは人称代名詞で占められており、日本語では人称代名詞ではなく書き手と対象との関係や亡くなった人との親族関係を示す語が大半を占めている。ドイツ語の「du (二人称単数・親称)」が全体で3番目に多く使用されているのに対して、日本語の「あなた」は9番目になっていることから、人称代名詞の使用の傾向の違いが確認できる。

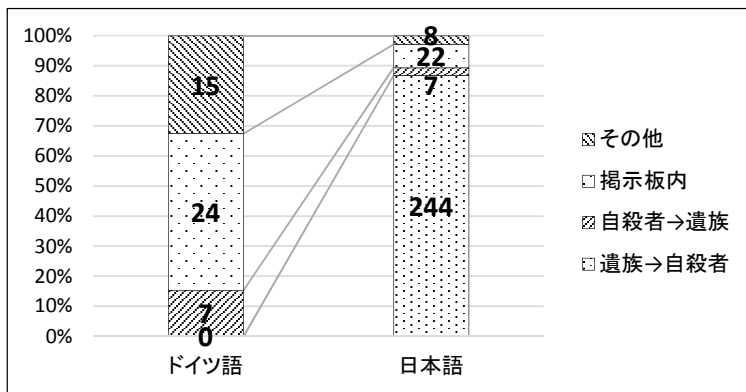
また、ドイツ語では一人称単数を「ich (私)」としか表さないのに対して、日本語では様々な一人称の表現がある。特に、日本語コーパスでの「お母さん」「お父さん」のデータは一人称・三人称の両方に用いられるのに対し、ドイツ語では「私」はichであり、Mutter (母)、Vater (父)は三人称に限られており、これらもまた言語そのものが持つ人称語彙の指示対象制約を反映している。

ここで非常に興味深いのは、日本語の自死遺族掲示板コーパスにおいて「お母さん・お父さん」が1人称として用いられるのは、「話者(筆者)」が「死者(亡くなった息子や娘)」に対して語りかける形式に限られているということである。これと似たことが「あなた」の指す対象の違いにも見られ、日本語の掲示板コーパスにおいて「あなた」を含む文例は、掲示板上で投稿を読んでいる他者ではなく、死者である「あなた」を指して

日本人はどう悲しむか (Michaela Oberwinkler)



【図 8】 感謝「Danke/ ありがとう」の発話対象



【図 9】 謝罪「Entschuldigung /ごめん (なさい)」の発話対象

いることが非常に多い。これは、表現の場としてのウェブ上の掲示板が、本来意図されている「他の自死遺族に対する語りかけ・励ましの場」としての機能を担っているだけでなく、「話者（筆者）が死者に語りかける場」としても機能しているためである。

4.4 感謝と謝罪の表現

本章第 1 項の感情語彙比較の項では、日本語の自死遺族掲示板コーパスではドイツ語のものに比べて罪悪感を表現する語彙が極めて稀にしか用いられておらず、そうした感情は構文の違いによって、そして「ごめんなさい」という謝罪の表現によって間接的に表現されていると考察した。この点について、特に日本語の掲示板で非常に高い頻度で見られた「感謝」（日本語：ありがとう、ドイツ語：Danke）と「謝罪」（日本語：ごめん（なさい）、ドイツ語：Entschuldigung）の表現について、「{誰からの・誰に対する} 感謝／謝罪」であるかを分析した。

まず、感謝を表す「ありがとう」と「Danke」は、どちらも発話の相手に対して用いる表現である。使用頻度調査の結果では、ドイツ語の「Danke」が 68 回に対して日

本語の「ありがとう」が686回と約10倍であり、使用頻度そのものに大きな差がある。この結果をi.) 自死遺族から亡くなった人への感謝、ii.) 亡くなった人から自死遺族への感謝、iii.) 掲示板・フォーラム内の他者への感謝の3つに分類して割合を比較した(図8)。ドイツ語と日本語のコーパス間ではこの割合に大きな差はなく、90%以上と殆どがフォーラム内の他者に対して感謝を述べる場合に用いられており、遺族から亡くなった人に対する感謝が次に多い。また、日本語のコーパスでのみ、自死した人が遺族に対して遺書などで書いた言葉を抜粋した「ありがとう」の用例が10件あったが、全体から見ると1%未満である。

これに対し、「謝罪」の調査結果はドイツ語と日本語の「謝罪の対象者」に明らかな差があった(図9)。まず、頻度調査の結果を見ると、ドイツ語の「Entschuldigung」が41回、日本語の「ごめん(なさい)」が281回と、ここでもやはり日本語での用例が7倍となっている。この結果を用例によってi.) 自死遺族から亡くなった人への謝罪、ii.) 亡くなった人から遺族への謝罪、iii.) 書き手から掲示板内の他者への謝罪、iv.) その他の4つに分類した(図9)。その結果、日本語コーパスにおける「ごめん(なさい)」の用例のうち80%以上にあたる244回が自死遺族から亡くなった人に向けての謝罪に用いられているのに対し、ドイツ語コーパスでは亡くなった人への謝罪として用いられた「Entschuldigung」の例が皆無だった。日本語コーパスでの用例はこの場合、多くは「ごめんね」の形をとり、死者に対して直接語りかける文脈のなかで使用されているのが特徴的である(e.g. 「お母さんが気づいてあげられなくてごめんね。」等)。ドイツ語コーパスの「Entschuldigung」の用例で最も多かったのは、遺族からフォーラム内の他者への謝罪(24件:約50%)であり、現実には(文字によって)会話している相手がWeb上にいる状態での謝罪に用いられている。日本語にも当然このような用例があったが(22回)、全体から見ると非常に小さな割合である。

この結果からわかることは、ドイツ人は掲示板を、現実にはウェブ上にいる同じ苦しみを分かち合うことのできる他者を見つけてコミュニケーションする場として利用し、悲しみを乗り越える方法を模索しているということである。本章第2項で述べた「Liebe(親愛なる)」の使用頻度が高かったことも、ドイツ人がインターネットの先に現実にいる相手を意識して語りかけていることを反映している。それに対し、日本人は掲示板をウェブ上の他者だけではなく、内的かつ私的な「もう会うことのできない死者」に語りかける場としても利用している。日本語コーパスでは、感情語彙の頻度調査で上位にあった「寂しい」「辛い」にも同様に「寂しかったよね」「辛かったね」など、亡くなった人物の心情を代弁し、語りかける形式の用例が見られる特徴があり、これらの感情語彙は書き手である遺族自身の心情ではなく遺族が想像した死者のものである。彼らは、相手の心情を慮り語りかけるという本来コミュニケーションできる相手と行うはずの行為を、コミュニケーションできなくなった相手(死者)に対して擬似的に行っているのである。インターネット上の掲示板とは、読み手が存在するにも関わらず具体的に誰

を相手に語りかけているかが目に見えない場である。そのため、死者に直接語りかけるかのような投稿もさして不自然ではなく、自分の中で死者に語りかけることによって悲しみと向き合うという内的な感情表出と、他者に対してその感情を開示し共有するという外的な感情表出を両立させることのできる特殊な場となっているのではないだろうか。筆者は予備調査で最初に日本語の自死遺族掲示板を見た際、古典的随筆や日記文学のような書き方だという印象を受けたが、これは私的かつ内的な感情表出という点で類似性があったためかもしれない。

ドイツ語コーパスで、*Entschuldigung* (ごめんなさい) という表現が亡くなった人に向けての謝罪の意味で用いられなかったのは、この表現が謝罪する相手を必要とする表現だからであり、掲示板には免罪を求める相手である亡くなった人がいないことが理由と考えられる。これに代わって、罪に関する語彙 *Schuld* (罪)、*schuldig* (罪のある) などが多かったことは、自分の罪悪感を言葉にして、亡くなった人に対する自分の罪の意識をネット上の社会にいる同じ経験をもつ第三者に対して語っていることを反映している。これもまた、社会に向けて自分の悲しみを打ち明け共有することによって自らを癒すという、悲しみと向き合うための社会的プロセスの一部である。これらは感情言語の表出法の違いが感情そのものとの向き合い方を反映している好例であり、そこには明らかな文化的差異が存在している。

5 おわりに：結論と今後の研究への展望

本稿では、人の悲しみ方は背景とする文化によって異なるか、異なるとすればその感情はどのように言語として表出しているかという問いをテーマに、自死遺族掲示板における悲しみの言語表現について考察した。

日本語の均衡コーパスとの比較によって見えてきたのは、日本語の自死遺族掲示板においては悲しみの感情である「後悔・精神的被害・自責」に関する構文「～てしまう」、被害の受身文、使役文が有意に多く用いられている点である。加えて、それらの構文が連続した形では、「使役+てしまう」の使用が多いこともわかった。また、日独の自死遺族掲示板コーパスによる対照調査では、両言語で非常に似た感情語彙が高頻度で使用されている一方、ドイツ語のコーパスではいくつかの比喩表現が頻度調査の上位に集中する (cf. 感情語彙、動詞の調査) など、言語間で異なる点も多い。また、人称語彙の使用や「ごめんなさい」と「ありがとう」の比較から、ドイツ人の投稿者が専らインターネット掲示板の第三者を読み手として想定しているのに対し、日本の自死遺族は掲示板の他者に対してだけでなく、亡くなった人に対して語りかける形での投稿が多いなど、興味深い傾向の違いが明らかとなった。

身内の死を悲しむことそのものに文化的な違いはないのかもしれない。しかしその悲しみを言葉によって表現しようとするとき、我々の言語はその感情がどのように表

出されうるかを制限し規定してしまう。自分を責めることによって悲しみを表すとき、ドイツ語話者は「罪」という語彙を通じて自分の罪悪感を他者に伝え分かち合おうとするのに対し、日本語話者は自責の思いを「～させてしまった」など構文の変化によって伝える傾向にあった。また、言葉を伝えられなくなった相手に「ごめんなさい」と内的に直接語りかけることによって悲しみと向き合おうとしていた。内的な感情と向き合い、コントロールして表現し、社会と共有しようとするプロセスには、表現の場、文化的背景、文法的制約などが複雑にからみあって影響しあっており、それらの要因全てが言語・文化固有の感情の在り方の違いを生み出している。異なる言語的背景を持つ異文化間で感情を比較するとき、そこで使用される語彙同士を比較するだけではその全体像は見えてこない。構文、語彙、発話の向けられる相手など、様々な要素が感情の伝達に携わっており、それぞれの要素の重要性は言語ごとに異なっていることが今回の調査のそれぞれの調査項目において浮き彫りになった。

また、感情語彙をカテゴライズすることの難しさなどから、感情言語を多言語間で統計的に比較することそのものの問題点も見えてきた。こうした問題については、認知言語学などコーパス言語学以外の視点からのアプローチが期待される。また、今回は踏み込まなかったが、文体の違いもまた興味深く、書き手の性別や年代をタグ付けするなどのプロセスを踏んだコーパス構築を行えば、社会言語学的な視点を交えた調査も可能となる。ただしこの場合、BCCWJのような均衡コーパスはこうした目的のためにデザインされておらず、比較によって特徴をあぶりだす今回のような手法を用いることが難しいため、今後研究を発展させるためには新たな手法的枠組みを考えて取り組む必要がある。

注

- 1 出典 Spiegel Online: Fukushima-Katastrophe: Warum Japaner anders trauern, Gavin Rees 著:
参考 URL:<http://www.spiegel.de/panorama/gesellschaft/fukushima-katastrophe-warum-japaner-anders-trauern-a-757813.html>
- 2 意志的な死については「自殺」をはじめとして日常的に使用される様々な表現があるが、本稿では原則的に遺族の心情とポリティカル・コレクトネスに配慮し、「意志的な死」という概念を非道徳性や反社会性と切り離れた「自死」という語を使用する。ただし、コーパスからの生データを引用する場合にはこの限りではない。
- 3 感情と言語の関係をコーパス言語学の枠組みの中で扱う研究では、近年、言語データに感情を表すタグ（感情タグ）を付与した感情コーパスの構築とその自動生成、またそれを利用した感情推定などの研究が盛んに行われているが、今回の調査とは手段も目的も異なるため、言及を避ける。

- 4 本調査における日本語コーパス収集・母語話者の判断が必要となった分析・論文の日本語化にあたっては、チュービンゲン大学嘱託研究員の岡松良佳が担当した。
- 5 Oberwinkler (2011) の予備研究で構築したコーパスの収録元は本研究におけるコーパスのうち 2010 年 11 月から 2011 年 11 月分までの約 1 年分であり、日本語 78,822 語、ドイツ語 75,016 語を分析対象とした。
- 6 コーパス収録元の掲示板 URL を以下に記載する。
青い空の彼方－自死遺族の心の癒しを求めて－
(日本語) : <http://www.geocities.co.jp/SweetHome-Skyblue/1963/index.htm>
-„Lebe dein Leben“: <http://www.selbstmord.de/forum/portal.php>
-„Suizid-Forum“: <https://suizid-forum.com/index.html>
-„Agus-Selbsthilfe“: <http://www.agus-selbsthilfe.de/>
-„Selbstmordforum“: <http://selbstmordforum.net/wbboard/>
-„Refugium“: <http://www.verein-refugium.ch/pages/forum.php>
- 7 「～てしまう」を抽出するにあたっては、例えば「死んじゃう・逝っちゃう」「死んじまう・逝っちゃう」などのバリエーションも調査の範囲に加えている。
- 8 「自死」は「自尽・自裁・自刃」などととも、18 世紀以降の文献で用例が確認されているが、明治期以降「自殺」という語を使用することがより一般的になっていた。近年になって「自死」を尊厳死としての意味合いを強調した表現として再評価し「自殺」に代わって用いるべきだとする動きが自死遺族を中心に広がり、2013 年 3 月に島根県が公文書での表記を「自死」に改めることを決定したことを皮切りに、議論が活発化している。新語ではないにも関わらず最近になって使われるようになった印象の強い興味深い語彙である。本調査では、語彙としての新規性とコーパス内での使用頻度の相関にも着目したが、これを論ずるには比較の前提条件が不確定であり、通時的要素の扱いが複雑で本筋を外れるため、本論では言及を避け今後の課題とする。
- 9 注 4 に同じ

参考文献

- 今井新悟・赤瀬川史朗・プラシャント・パルデシ (2013) 「筑波ウェブコーパス検索ツール NLT の開発」, 『第 3 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』, pp.199-206.
- Srdanović, I.・仁科喜久子 (2008) 「コーパス検索ツール Sketch Engine の日本語版とその利用方法」『日本語科学』 No.23, pp.59-80.
- 松本和幸・Bracewell, D. B.・任福継・黒岩眞吾 (2005) 「感情コーパス作成支援システムの開発」『情報処理学会 研究報告』 117, pp.91-96.
- 松本曜 (1998) 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』, 114, pp.37-83.
- 丸山岳彦・山崎誠・柏野和佳子・佐野大樹・秋元祐哉・稲益佐知子・大矢内夢子 (2011) 『「現

- 代日本語書き言葉均衡コーパス」におけるサンプリングの原理と運用』, 国立国語研究所 .
山内弘継 (1978) 「言語手がかりによる感情・情緒の心理学的測定の試み」『心理学研究』
49, pp.284-287.
- Ekman, P. · Friesen, W. V. (1971) Constants across cultures in the face and emotion,
Journal of Personality and Social Psychology, 17, pp.124-129.
- Benedict, R. (1946) *The Chrysanthemum and the Sword : Patterns of Japanese Culture*,
Boston, Mass.: Mifflin [et al].
- Kövecses, Z. (2003) *Metaphor and Emotion: Language, Culture, and Body in Human
Feeling*, Cambridge [et al]: Cambridge University Press [et al].
- Mauthner, F. (1923) *Wörterbuch der Philosophie - Neue Beiträge zu einer Kritik der
Sprache, Bd.3*, Leipzig.
- Mesquita, B. · Frijda, N. H. (1992) Cultural variations in emotions: a review, *Psychological
Bulletin* 112 (2) , pp.179-204.
- Mesquita, B. · Walker, R. (2003) Cultural differences in emotions: a context for
interpreting emotional experiences, *Behaviour Research and Therapy* 41 (7) , pp.777-
793.
- Nietzsche, F. W. (1950) *Also sprach Zarathustra: Ein Buch für Alle und Keinen* (11.ed.) .
Stuttgart: Körner Verlag.
- Oberwinkler, M. (印刷中) : Die Sprache der Trauernden - eine transkulturelle Korpusanalyse,
*Elektronische Publikationen der Gesellschaft für Japanforschung - Beiträge zum
Japanologentag 2012 in Zürich - Sektion Linguistik:*, pp.117-133.
- Schwarz-Friesel, M. (2013) *Sprache und Emotion* (2. ed.), Tübingen: Narr Francke
Attempto Verlag.